

水の源

MIZU NO MINAMOTO

47
2019
Winter



巻頭インタビュー

水源の里へ思いを馳せる

美の伝承こそ、集落継承の鍵

-日本の古民家に魅せられたアメリカ人-

東洋文化研究者

アレックス・カーさん

ウォークルポ

お茶屋のラーメン店

～好きで始めたこだわりの店～ 岡山県鏡野町

特集

第13回全国水源の里シンポジウム

香川県まんのう町、琴平町

首長リレー連載

鳥取県若桜町 矢部康樹町長

第11回全国水源の里フォトコンテスト

水源の里のうまいもん

栗きんとん 栗九里（くりくり） 宮崎県日之影町

美の伝承こそ、集落継承の鍵 —日本の古民家に魅せられたアメリカ人—

東洋文化研究者

アレックス・カー さん

我が国が持つ伝統的な建築物や自然の美。それに魅了された1人のアメリカ人がいる。彼の名はアレックス・カー。日本中を旅するうちに山深い集落で1軒の空き家と出会う。その建物を滞在施設に改修。疲弊する山村集落に交流と観光を持ち込むことを提案し、持続可能な集落へと様変わりさせた。仕掛け人アレックスさんにお話を伺った。

—長く日本にお住みですが、どんなところに魅力を感じますか？

まず、自然が美しい。人の手があまり入っていないジェラシック（笑）な自然にすごく魅力を感じます。自然の中にあるデリケートな部分。例えば、苔が生えた岩、ふわふわとした山の木々、一面に色づく紅葉、清らかな水など。これらは日本特有の宝だと思う。学生時代にヒッチハイクで全国をくまなく旅をしました。12歳の時に父親にカメラを買ってもらい、それ以来、旅のパートナーとしてずっと一緒です。カメラを持たずに旅をすることなど、あり得ません。そして美しいと感じたものは片っ端からカメラに収めていきました。それはもう膨大な数に上ります。そんな出会いの一つが徳島県の祖谷でした。

—祖谷で取り組まれた古民家再生の経過を教えてください

学生時代に祖谷で空き家と出会ったとき、私はこの場所に根付いて仙人になろうと真面目に考えたものです（笑）。当時はその空き家を改修して宿に使うなどという発想は全くありませんでした。今でこそ林道が整備されて、家のそばまで自動車で行けるようになりましたが、当時は幹線道路から山道を徒歩で1時間くらい歩かないと辿り着けない場所でした。ですから人に貸すなんてとんでもない話。それに水も電気もトイレ

すらない。そんな環境が逆に魅力的で、購入したその空き家を「麓庵」と名付け、友人と一緒に囲炉裏端生活を楽しんでいました。古民家改修といっても、当時は資金もない状態でしたので、友人と共にハンドメイドでコツコツと直すしか方法がありません。10年前に抜本的な大改修をするまでは、床から風が吹きあがり、冬場は寒さとの闘い。そんな環境でも海外からたくさんの人々がこの家を訪ねてくれました。

その後は、京町屋を改修し一棟貸しする宿泊事業を手掛けていました。それが始まりとなって祖谷の物件がある徳島県三好市から声が掛かり、東祖谷落合集落にある古民家や私が購入した古民家を整備することになったのです。現在の利用者は日本人8割、外国人2割という状況です。

—古民家の魅力は何でしょうか？

それはズバリ素材です。世界中に優れた木材建築物はたくさんありますが、その中でも日本の木材建築は突出していると思います。木を組み合わせる技術は見事の一言。加えて木材の多彩さ。松や竹など使われている木材の素材が素晴らしい。梁に使われる大木を削った跡などは彫刻のような美しさを持っています。また囲炉裏、土壁、茅葺屋根など使われている素材はすべて自然の恵みであるところもまた素晴らしい。それともう一つの魅力が日本建築の独特の空間です。襖や障

子で区切ることもできますが、全部開けると東屋のような開放感も得られます。幾何学的な空間が建具の使い次第で、見えたり隠れたりする空間の妙。これこそが日本建築の伝統的で優れた魅力だと思います。茅葺屋根でも使っている素材は多様。一番下は藁で葺き、雨風に触れるところは茅で葺くなど、長年の経験や知恵が日本建築には一杯詰まっているんです。リフォームする場合でも、このような日本人の知恵や技術が駆使されている部分はできるだけ保存しておきたいと考えています。

—水源の里（限界集落）再生のヒントがあれば？

残念なことに、美しい日本の集落は過疎化や高齢化の影響でどんどん疲弊しています。それら集落を持続可能にするために活用すべきは観光だと思います。我々が祖谷で取り組んだ古民家を改修して宿にする。そのことで多くの観光客が祖谷を訪れるようになりました。そこから交流が生まれ、小さいながらも産業が守られています。観光は非日常を提供する産業です。ですから集落が昔から持っている景観を守ることが何よりも大切です。ただ、過疎や高齢化で集落は弱っているのに、

おじいさんやおばあさんにがんばれというのは酷です。すべてを集落任せでは実現しない。きっかけ作りなどは行政がリーダーシップをとって働きかけることが大切だと思います。大分県の竹田市が移住・定住で成果を上げたのも、行政と住民がこういうプロセスを経て取り組んだからこそです。

—集落を元気にするアレックスさんからの提案

また古民家の話に戻ってしまいましたが、全国どここの集落でも今はトタンで覆われているが、もともとは茅葺だった母屋、それに白壁の蔵。それ自体が素晴らしい宝だと認識してほしい。その上で、どこでも良いというわけではなくて、近くに歴史的な名勝があるとか、里山の美しい景観があるとか。いわゆる物語性がある場所を選択する。空き家という資源と美しい自然景観をミックスすることができれば、どこでも、いつでも人が訪れ賑わいは生まれてくると信じています。大切なことは、集落が保全し続けてきた「美」を伝承すること。それこそが集落継承の近道ではないでしょうか。

【聞き手・永井 晃】

Profile

アレックス・カーさん

東洋文化研究者 1952年米国メリーランド州生まれ。74年エール大学日本学部卒。64年に初来日し、横浜市のアメリカ海軍基地で2年間を過ごす。72～73年慶応義塾大学に留学。77年から京都に居を移し、2005年にNPO法人「麓庵トラスト」を共同で立ち上げる。古民家を改修し、滞在施設として運営している。『美しき日本の残像』（新潮社）、『ニッポン景観論』（集英社）など著書も多数。





お茶屋のラーメン店

～好きで始めたこだわりの店～

かがみのちょう
鏡野町 岡山県



岡山県から鳥取県に抜ける国道179号沿いにポツンと佇む1軒のラーメン屋。営業は土日のみで、1日限定60食。鏡野町特産のトマトをトッピングした「鏡野ラーメン」が話題を呼んで、知る人ぞ知る人気のお店に。経営するのは、片田秀二さんと千津恵さんのご夫婦。夫唱婦隨の仲睦まじい味のラーメン店をレポートした。

ポツンと峠の一軒家

晩秋の朝は冷え込む。岡山市内のホテルを出た瞬間、吐く息が今シーズン初めて白く見えた。休日でもまだ早朝の静けさを残す町を出発し岡山自動車道を北進。北房ジャンクションで中国自動車道に乗り

換え院庄インターチェンジ、そこからさらに国道179号を約1時間、鳥取方面に向かう。今秋は初旬から気温が高く紅葉も例年より遅れがちだった。さすがに11月も半ばに差し掛かり紅葉が進み、一年で最も美しく艶やかな季節を迎えていた。

このあたりはスギやヒノキなど常緑の人工林が比較的少なく、四季の移ろいが木々の変化で感じられる土地柄だ。山陽路では快晴だった雲行きが、北に進むにつれ怪しくなってきた。

あと3分も車を走らせると、鳥取県との県境にある国道沿いの一軒



開店時のみ国道に掲示される「ラーメン」の幟

家。そこが今回取材をお願いした、片田秀二さん（69歳）と妻の千津恵さん（64歳）のお二人が営む「お茶屋のラーメン店」だった。通常ラーメン屋と聞くと、赤や黄色の派手な看板をイメージする。しかし、ご夫婦が営むお店は、よほど気を付けて走っていないと見落としてしまうような小さくて素朴なお店。ご夫婦の人柄がしのばれる飾らない佇まいだ。

“お茶屋の”ラーメン

開店前の多忙な時間に到着してしまい恐縮しながら店を覗く。すると愛想の良いご婦人が気さくに声をかけてくれた。店内に招き入れてもらいテーブルに着いて取材が始まった。店主の片田秀二さんは顔の色艶もよく、恰幅の良い好々爺。ラーメン店に至るまでの経緯を伺った。津山市内の学校を卒業後、同市で就職。本人いわく「飽きやすい性格」なんだそうで、若いころは職を転々とし住居も岡山市、大阪市などを渡り歩く日々だった。津山に帰って建築関係の会社に腰を据え、千津恵さんという伴侶にも恵まれた。会社では役員にまで上り詰め、人生の至福を迎えたかと思いきや、ここでも飽きやすい性格が“悪さ”をする。「役員になって、毎日椅子に座って会議ばかり。現場がどんどん遠くなってつまらなかった」。そんな理由で、役員椅子をあっさり返上。また新たな職探しの日々が始まった。



国道179号沿いにポツンと佇むお茶屋のラーメン店

思いついたのが料理などに添えられる「飾り葉」の販売。今でこそ“葉っぱビジネス”として徳島県上勝町の成功が有名だが、当時は葉っぱを売ることなどだれも発想がなく、相手にはしてくれなかった。大阪の中央卸市場にも何度も足を運んだが、空振りの連続。中央卸市場を諦めて、大阪でも多種多様な商品を扱う「黒門市場」に目を向けたとき、一条の光明が差し込んだ。「面白い」と言ってくれる人が現れたのだ。そんな反応を頼りに「枯れずに長期保存できる飾り葉」の市販化を目指して研究の日々が続いた。その過程で地元・鏡野の野山に群生している笹の葉に出会う。もともとこの地域では、笹の葉をお茶をにして飲む習慣があった。それに笹の葉は無料でいくらかでも採取できる。そんなところに注目して「飾り葉」から「笹の葉茶」に方向転換。それから32年、笹の葉茶の事業は健康茶ブームにも後押しされ「生業」として確固たる基盤を作り上げた。後継者も育ち、2、3年後には事業を継承していく算段もついた。めでたしめでたしで完了。いやいや本題はこれから。お茶屋のラーメン店の成り立ちに話は移っていく。

趣味で始めたラーメン店

「ラーメン店は本当に趣味です」言下にそう言い放った片田さん。実は無類のラーメン好きで、若いころインスタントラーメンだけで1か月間過ごしたこともあったという。しかし作る方は全くの素人。最初は本を読んだり、プロの店に出向いて味を盗んだりの日々が続いた。スープづくりも豚骨、鶏がらなど様々な食材を試した。1か月間不眠不休でお客様に出せるラーメン作りに没頭した。研究が始まって2か月目のある日、ついに「お茶屋のラーメン店」が開店した。そ



自家製のお茶はペットボトルで提供される



トマトとレモン入りの大人気「鏡野」ラーメン

んな秀二さんを奥さんの千津恵さんはどう思っているのかを尋ねると「この人は言い出したら人の言うことは聞かん性格だから…。お客様と話をしたり、ラーメンの感想を聞いたり、店を始めたことで出会いが増えました」と好意的。一方、秀二さんは「ラーメン店の仕事は一人ではできない。お前と一緒にやらせてあげよう」と殺し文句で始めたが、今では奥さんのほうがのめり込んでいると話す。そんな夫唱婦隨のラーメン店。話題にならないはずがない。一番の話題作が「鏡野ラーメン」。後ほど食レポートでお伝えするが、塩味の優しいスープにラーメンの通常の具材であるゆで卵、焼き豚、ナルト、モヤシ、メンマに加え、なんと鏡野特産のトマトとレモンが添えられ



22席の店内は開店後、瞬く間に満席に

た一風変わったビジュアル。新聞などで取り上げられ、今や当店一の人気商品となっている。ここ鏡野で毎週末店を開くようになって19年目になるそうだが、今でも商品開発の研究は続いているそう。

狭い店内は瞬く間に満席に

午前11時の開店と同時に、客が1組、また1組と来店。赤穂市からこの日初めて来店したという家族は「毎年、紅葉狩りでこの辺を訪問しています。国道を走っているときに、ずっと気になっていたお店。今日念願の来店が叶いました」と嬉しげに話してくれた。また倉



ラーメン作りも共同作業でできばきと



河川敷に設けられた足湯が特徴の「奥津温泉」は峠のラーメン屋から車で約10分

吉市から来店した夫婦は「週末は二人で奥津温泉に浸かりに来ます。帰りには必ずここでラーメンを食べます」と、常連さんにも支えられているようだ。そうこうしている間に22席の店内は瞬く間に、ほぼ満席状態。店内にはわかに慌ただしい雰囲気に。そんなとき電話が鳴って出前の注文も舞い込む。忙しいとどうしても話しぶりが邪険になったり、声のトーンが高くなったりしがちだ。が、お二人の様子を眺めていると、まるで忙しさを楽しんでいるよう。お話を伺っていたときと同じ空気で作業が続く。本当に二人ともこの仕事が好



発泡スチロールの箱がオカモチ代わり

きなんだと改めて感じた次第。一方、店の前の駐車場を覗くと岡山ナンバーはもちろん鳥取や大阪、姫路といった県外のナンバーがずらり。なかには飛騨からの車も見受けられた。特別なPRはしていないということだったので、改めて「口コミ」とそれを裏付ける秀二さんの研究の凄さを実感した。

薬膳料理のような味わい

さて、お店がひと段落した12時半。筆者もトマト入りの「鏡野ラーメン」を注文。待つ間、厨房での作業を見学させてもらった。5～6時間火で炙り余分な脂を落として作ったという「炙り豚」を厚さ5ミリくらいにカット。再度、網で炙るところから調理が始まる。もともとは、トロトロになるまで煮込んだ豚肉をトッピングしていたそう。この煮豚はお客様からも好評だったそうだが、秀二さんいわく「同じものを作っていると飽きてしまった」と一言。ここでも“あくなき探求心”が顔を覗かせたようだ。次に麺を湯に投入。この麺も



軽トラックでさっそうと奥さんが出前に出発

こだわりの一品。これまでに5種類くらい試した結果、現在は山口県から仕入れているものを使っている。どんぶりに塩味のベースを注ぎ、そこにスープを張る。スープも様々試した結果、現在の鶏肉と鶏の皮から出汁を取る形となった。麺が湯がきあがると丁寧にスープの中に投入し、先程の炙り豚にモヤシ、メンマ、ナルト、半熟卵。そして注目のトマトと最後にレモンを添えて完成。「いただきます」と手を合わせ、まずスープを口に含む。優しい塩味とレモンの香りが爽やか。次に炙り豚を一かじり。こちらは結構な歯ごたえ。噛むほどに豚の滋味が口内に広がってくる。麺はスープがよく絡む細麺。しっかりとしたこしが印象的だ。さて、どのタイミングでトマトを食べるか？ その思



こだわりの炙り豚。提供前に再度網焼きする

考時間が結構楽しい。トマトは酸味のないフルーツのような味。塩味のラーメンとのマッチングは非常に良い。どの食材にも丁寧な下準備が施されて、店主のこだわりを感じる。

食べ進むにつれ体が芯から熱を帯びてくる。額からは大量の汗が噴き出る。良質の薬膳料理を食べているかのようだ。スープを最後の一滴まで飲み干し完食。すべての食材が強い主張をしない代わりに全体で絶妙なバランスが保たれている。今年のラグビーワールドカップで、日本チームが「ワンチーム」を合言葉に結束したように、「ワンチーム」が一杯のどんぶりで表現されているかのようだ。「味噌」、「醤油」、「辛美人」など他の味も試してみたいな。

【文・永井 晃】

鏡野町はこんなまち



鏡野町は岡山県北部、鳥取県境に位置する人口12,883人、面積419.68km²の町。山に囲まれた町内を岡山三大河川の吉井川が流れ、豊かな自然の中でキャンプやスキーをはじめ数多くのアクティビティを体験・体感できる。美作三湯の一つ奥津温泉は江戸時代から開かれ、「足踏み洗濯」が行われる露天風呂を中心に風情のある老舗旅館や民宿が立ち並ぶ。この温泉の下流3kmに渡り流れる吉井川沿いの渓谷は、昭和7年に名勝「奥津溪」として国に指定されている。秋の奥津溪では、紅葉したモミジやブナ・カエデなどが渓谷や山々を染め上げ、絶景の観光スポットとして人気だ。

特集

第13回 全国水源の里 シンポジウム

地域の誇りと歴史が拓く未来 ～「関係人口」は地域に何をもたらすか～

山あいの田園風景をキャンバスに作品が展示される「かがわ・山なみ芸術祭」

水源の里が抱える多様な課題と解決策を議論し、その果たす役割について考える「全国水源の里シンポジウム」。13回目を迎えた今回は、香川県のまんのう、琴平両町の共同で開催され、地元住民や全国の参画市町村などから約250人が参加。2日間にわたるシンポジウムの模様をレポートする。

初の2町共同開催

今大会の舞台は、香川県の南西部に位置するまんのう町と琴平町。満濃池を中心とした利水と伝統を活かしたまちづくりにより「水の

郷」百選に選定されるまんのう町。そして「讃岐のこんぴらさん」と親しまれている金刀比羅宮の門前町として歴史と文化の息づく琴平町。この成り立ちの異なる2町が協力し、深刻化する人口減少と少子

高齢化に伴う共通の課題解決に向けて、近年注目される「関係人口」にフォーカスしたシンポジウムが開催された。

実行委員長の栗田隆義まんのう町長は開会挨拶で「近隣の自治体がお互いを補完し合いながら、一緒になって課題解決に取り組んでいくことができれば、より効果的で効果的な施策の実施と成果を挙げていくことができると思う。その意味でも、本大会の開催は私たちにとって大変意義深い。このシンポジウムを核として、それぞれの市町村がなお一層強く結ばれ、



開会のあいさつをする栗田まんのう町長



まんのう町ゆかりの二宮忠八(ちゅうなんちゅうはち)太鼓の演奏で大会はスタート



過疎地域の課題解決に向けた取り組みが国民運動として展開していくことに繋がると確信している」と力説した。

地方最大の魅力は「課題」

基調講演ではローカルジャーナリストの田中輝美さんが登壇。「関係人口」は地域に何をもたらすか」と題して講演を行った。

田中さんは「関係人口」という言葉について「観光以上定住未満」で「特定の地域に、観光客よりは関わるけれども定住まではせず、継続的に関心を持ちながら関与する人」と定義する。そして現在、都市部で生まれ育った若者たちは「ふるさと難民」であるとし、人との繋がりや自分が役立てる場所を求めているという。

「都会の若者が地方に感じている最大の魅力は“課題”。私たちがマイナスにとらえがちな地域課題が、彼らにとっては“関わりしろ”であり、その解決に向けて自分の役割があるということが何にも代え難い喜びに繋がる。しかし、移住しないと地域に関われないというのはハードルが高い。地方にとってもAll or nothingというのはいらない。都市と地方、両方の課題解決のために“関係人口”という選択肢が必要」と訴えた。

関係人口の具体的な関わり方については「買う、行く、働く」と

いう分類で例示して説明。買うは、クラウドファンディングやふるさと納税など、遠隔的に特定のまちに資金支援を行うことであり、行くと働くは、地域のイベントや祭り、自治会作業などを担い手として支え、一緒に地域をつくっていくこと。ボランティアとの違いは、一度きりではなく何度も通い、継続的に人間関係を築いていくという点にある。関係人口は「お客さん」ではなく、地域課題と一緒に解決していく「仲間」なのだ。関係人口の力を信じて、どのように活かすかによって、地域の未来は大きく変わりそうだ。

「諦めの払拭」が最大の意義

田中さんはさらに、関係人口そのものがゴールであり移住・定住のためのステップや施策と捉えてはいけないと強調する。「大事なのは地域の課題解決。定住してもらうことを目標にするのではなく、地域に継続的に関わり続け、課題解決を手伝ってもらうことが大切なゴールなんだと認識してほしい」と田中さん。これまでは、観光・交流と移住・定住の二本



「関係人口」について解説するローカルジャーナリストの田中輝美さん

柱でやってきたが、これに関係人口を併せた三本柱で地域活性化に取り組むことで、地方自治の可能性が広がると指摘する。

そして関係人口最大の意義は、住民に「諦めの払拭効果」が得られるという点にあるという。地域のことを一緒に考え、応援してくれる若者がいることで、住民自身が我がまちへの誇りを取り戻し、もう一度頑張ろうという意欲を呼び起こすことこそが、数字では測れない関係人口の力なのだ。

抗えない人口減少の中、各地で移住者を奪い合うゼロサムゲームを続ける時代から、地域を支える



第11回全国水源の里フォトコンテスト入賞作品の展示



地元特産品ブースは来場者に好評



会場には全国から約250人が訪れた



パネリストからは、それぞれ熱のこもった意見が交わされた

人材をシェアする時代に転換しつつある。

都市と地方が相互に思いやる

パネルディスカッションでは、徳島大学大学院准教授の田口太郎さんをコーディネーターに、琴平町地域おこし協力隊「チーム縁の下」の山崎智久さん、「ことなみ未来会議転出子懇談会」の横井英生さん、NPO法人「ねりやかなやレジデンス」代表の佐藤理江さん、先に基調講演を行った田中さんの4名のパネリストにより、シンポジウムテーマについて活発な意見交換が行われた。

山崎さんは「琴平町は意外に思われるが過疎高齢化が進む地域で、世代交代ができずシャッターを下ろす店や児童数減少による学校の

統廃合など様々な課題を抱えている。そうした課題解決策を多業種で話し合う場として“琴平コトコト会議”を設置。こんぴらさんだけに頼らないまちづくり、観光以外で町

を盛り上げようという試みは、地元にしがらみのない人間だからこそできる変革かもしれない」と発言。

横井さんはまんのう町の中でも特に高齢化率の高い川奥地区の集落調査を行う中で、「居住はしていないが頻りに往来しながら親世代の生活サポートを行ったり、お祭りや消防団などにも参加したりするなどして地域を支える“転出子”の実態が明らかになった。そこで、転出子を対象とした懇談会を定期開催し、転出子ネットワークによる集落機能サポートの可能性を探っている。居住を住民という概念の前提にせず、地域に気持ちを有する人という見方に広がっていくことが重要」と語った。

佐藤さんは「学生時代に訪れた

奄美群島に魅了され通い続けること20年。奄美は移住希望者は多いが住宅物件が乏しい。そこで現在はNPOを立ち上げて、現地の空き家や空き地の活用策を模索している。地域の方々にも問題意識はあるが、解決のきっかけがない。昔からの人間関係や地域性に縛られない“よそ者”が風穴を開ける役割を果たしたい。まんのう町出身女性も多数活躍している」と力説。

田中さんは「3人の皆さんはそれぞれが地域と関係人口を繋ぐ役割を担っている。今回改めて“繋がり”は今や“資源”であり、地方ではマイナスイメージだった“しがらみ”が評価される時代がやってきたと感じる。これからは胸を張ってその資源を活かして、都会の人たちにアピールしていきたい」と意見を述べた。

コーディネーターの田口さんは「関係人口は量ではなくて質。地域の課題解決に必要な人材とのご縁や繋がりをしっかりグリップして引き寄せるということが重要なポイントになる」と総括した。

今回のシンポジウムは、今後の地方創生のキーワードにもなる「関係人口」について、前回大会からさらに深掘りした内容が紹介され、参加者の理解も一層深まったと感じた。

*

讃岐の水がめ「満濃池」

シンポジウム翌日は両町内5コースで現地視察が行われ、計81人が参加。筆者は「ことなみ未来会議とかがわ・山なみ芸術祭」を見学するコースに参加した。

最初の訪問先は、町名の由来にもなっている、日本最大級のかんがい用ため池「満濃池」。空海が唐で学んだ土木技術を駆使して改修にあたったといわれ、歴史的価値が高く、国の「名勝」、また「世界かんがい施設遺産」にも登録され



「讃岐の水がめ」と呼ばれる美しい満濃池

ている。周囲22km、水深20m、貯水量1,540万㎡を誇り、県内7,300戸の農家3,000haの農地に水を供給。近年は一部上水（水道用水）としても利用されるなど、この地域の生活に大きな役割を果たしていることから「讃岐の水がめ」とも呼ばれる。毎年6月に田植えの水を放出する年中行事「ゆる抜き」は地域の夏の風物詩。古くから水不足に悩まされてきた香川県では、農業用水の確保に尽力してきた先人への感謝の心が脈々と受け継がれており、この日も県内の園児や小学生が大勢見学を訪れ満濃池の歴史文化を学んでいた。満々と水をたたえ、人々の暮らしを潤す“母なるため池”は、これからも多くの恵みと癒しをもたらす続けそう。

住民が主役の「未来会議」

続いて訪れた「ことなみ未来館」（旧琴南中学校）では「ことなみ未来会議」の取り組みについて話を伺った。琴南地区では2015年までの30年間で人口が約40%減少。16年3月には琴南中学校が閉校になるなど、目に見えて進行していく地域の衰退に危機感を募らせた住民は「行政まかせじゃなく、自分たちの手で何かやらんといかん！」



昼食にはことなみ未来食工房が作ったお弁当をいただいた



やまなみ芸術祭の運営に携わる原博史さんが作品を案内してくれた



校舎と調和した木の造形作品に興味津々の参加者たち

と立ち上がる。そして、地域の進むべき方向性を住民自身が考え、意思決定していくための場としてこの未来会議を発足。シンポジウムのコーディネーターも務めた田口准教授をアドバイザーとして招聘し、中学校の校舎棟利用などをはじめとする地域活性化や人口減少対策に取り組んでいる。

現在5つの部会を設置して事業を実施しているが、なかでも好評なのが高齢者部会の配食サービス。地域の有償ボランティア会員で調理した弁当を、手分けしてお年寄り宅に配達する。見回りも兼ねているので、よろず相談窓口や安否確認にもなり、定期利用者は50人を超えるそう。そこから派生して、歯科診療への送迎や買い物サービスも展開。地域全体で高齢者の暮らしをサポートしている。事業を考え実施するのはあくまでも住民だが、その施策を財政面で後方支援するのは行政。どちらも頼りすぎず任せすぎず、自分事として問題解決に取り組む姿勢に感銘を受けた。

かがわ・山なみ芸術祭

また視察当日は3年に1度開催される「かがわ・山なみ芸術祭」の会期中で、同館や地域各所に展示された木を使った造形アート作品を見学。この芸術祭も中学校校舎棟利用の一環で、地元で活躍しているアーティストが中心となって「ボトムアップ型」で作り上げる美術展だ。

「過疎・高齢化・不便と暗いイメージの中山間地域で、芸術祭という明るくて前向きな情報発信が行われること自体がこの事業の大きな意義であり動機。ここで暮らす芸術家として地域に恩返しをしたかった」と話す文化活動部会の原博史さん。校舎、古民家、田んぼ…など、いわゆるオフミュージアムで行われる芸術祭は、出来上がった作品をシェルターに入れて保護する美術館での鑑賞とは様相も趣きも異なる。一つ一つの作品が、展示場所の歴史文化や生活している人々の暮らしを踏まえて創られているため、ここでなければ完成しない、ここに来ないと鑑賞できない、風や気温までもが作品の一部であるような一期一会の味わいが感じられた。地域をゆっくり散策してもらえよう配置されたアート作品を辿りながら、この取り組みが琴南地区の「心の空洞化」や「誇りの空洞化」の払拭につながっていることを実感した。

【文・白波瀬聡美】



町内の道沿いの古民家も作品に。作者は県内在住の河野博さん、作品名は「ビバ・ふるさと」



満濃池の歴史や構造について、町土地改良区の浅野事務局長から説明を聞く



跡地利用を検討している旧琴南中学校（ことなみ未来館）。山なみ芸術祭の会場にもなっている



町内の小学生も満濃池へ社会見学に訪れていた



ことなみ未来会議の代表を務める山本幸作さんから説明を聞く



鳥取県・若桜町
やべやすき
矢部康樹 町長

緑と清流のまち若桜

若桜町は鳥取県の東南端に位置し、兵庫と岡山両県の県境に接していません。面積は約199km²であり、そのうち95%は森林です。

中国地方では大山に次ぐ高峰氷ノ山（標高1,510m）があり、冬はスキーやスノーボード、夏は登山やキャンプ、トレイルラン、シャワークライミングなど、オールシーズン型の氷ノ山リゾートとして多くの皆さんに年間を通して楽しんでいただいております。

子育て支援の充実

現在、人口減少や少子高齢化など多くの課題を抱えていますが、その中で特に子育て支援には力を入れ取り組んでいます。

平成24年4月には施設一体型の小中一貫校「若桜学園」を設立し、1年生から4年生、5年生から7年生、8年生から9年生の3ブロックに分けた教育を行っております。

幼保連携型認定こども園「わかさこども園」では平成26年4月に全国で初めて0歳児から保育料（給食費含）を無償化する取り組みを始めました。更に、入園時に園児服、体操服も無償支給し、保護者の負担軽減に努めています。こども園に併設して子育て支援センターを建設し、親子で遊び学べる環境も整えております。

また、0歳から高校生までの医療費助成や三世帯が居住している世帯に居住支援金の交付、1歳未満の乳児を家庭で保育する人に子育て応援給付金（月額3万円）の支給、出産祝金や入学祝金の支給、児童・生徒の給食費の2分の1助成また高校生の通学補助として1人月額1万円の支給などのほか、町内の児童・生徒にはわかさ氷ノ山スキー場の

リフトを無料にしたり、町営温水プールを春・夏・冬休み中は無料開放したりしています。

定住施策として若者住宅の建設を進めるとともに、家賃の助成なども行い、若い世代に住みやすい環境づくりに努めております。

町民の安全安心のために

地球温暖化などにより台風や集中豪雨など、いどこで大きな災害が発生してもおかしくない状況になっています。

若桜町では町民が安心安全に暮らせるよう防災対策にも力を入れており、町独自で町内の河川20カ所に監視カメラを設置。河川の状況を24時間監視できるようにしています。町長室では大型モニターに河川の状況がリアルタイムで映し出されます。カメラの操作もできるようになっており、その状況を見ながら対策について協議できます。

また、全家庭にテレビ電話を設置し、様々な情報を表示したり、相手の顔を見ながら話をしたりできるようにしているため、保健指導や安否確認の際に大変役に立っています。テレビ電話では河川監視カメラの様子も見えるため、避



難する判断材料として使っていただいています。

若桜鉄道と観光振興

若桜町は宿場町、城下町として栄えた町であり、国の史跡に指定された若桜鬼ヶ城のほか、若桜宿には古い町並みが残っています。

また、若桜鉄道の駅舎は国の登録有形文化財に認定されているうえ、転車台やSL、DD（ディーゼル機関車）、ブルートレインなども残っており、貴重な歴史的遺産として注目されています。若桜鉄道では2年前から観光列車「ななつ星」や特急「つばめ」で有名な工業デザイナーの水戸岡鋭治さんデザインの観光列車を導入し、多くの観光客に好評を得ております。来年の3月には水戸岡さんのデザインにより若桜駅舎の内部もリニューアルするほか、新たな観光列車も導入予定です。

また若桜鉄道にある「隼」駅が、株式会社スズキ二輪のオートバイと同じ名前であることから、同社にご協力をいただいた「隼」ラッピングの列車も走っており、ファンに大人気です。

若桜町には、ジビエや鯉料理、豚肉、地酒、エゴマ、味噌など特産品もたくさんあります。見どころ満載の若桜町に是非おいでください。



若桜町防災カメラ



水戸岡鋭治さんがデザインした観光列車「昭和」



小中一貫校「若桜町立若桜学園」

第11回

全国水源の里 フォトコンテスト

過去最多の応募数、グランプリは「蛙の川流れ」(土田陽介さん)に

「水源の里」らしい生活や文化、四季折々の表情などを取めた作品を募集する、全国水源の里フォトコンテスト。11回目となる今回は昨年よりさらに応募点数が110点増え792点となり、過去最高を更新しました。また応募人数は279人となりました。

受賞された作品の数々をここにご紹介いたします。

審査員

たぬまたけよし
田沼武能 (一般社団法人日本写真著作権協会会長)
わしだきよかず
鷺田清一 (哲学者、せんだいメディアテーク館長)



作品を選考する二人の審査員



『蛙の川流れ』 撮影地:和歌山県古座川町 土田陽介さん (群馬県前橋市)

【講評・田沼】 フォトコンテストで大事なことは、過去の作品を真似することよりも自分がその場所で感動してそれを写真に撮ること。それが素晴らしい写真になるのです。このカエルの写真もそうですが、いままでの応募の中で、カエルが泳いでいる写真はありませんでした。しかしこの写真では強い川の流れの中でカエルが悠然と泳いでいて、水が大切であること、また自然と人間が共生していかなければいけないことをよく表現しております。鷺田先生もまた同様にお考えのようでしたので、今回グランプリに選ばせていただきました。



『田んぼの胴上げ』 撮影地:宮崎県美郷町 深江清文さん (大分県津久見市)

【講評・田沼】 中心の胴上げされている人、また両側の青年の泥だらけの顔が、なんともいえない生きる力を感じさせてくれます。泥んこ祭りなので周りに写真を撮る人がたくさんいて、カッパを着てるんですね。カッパを着て泥を受けないように写真を撮っている。やはりこれも水。水は資源であり大切なものであるわけですが、土が混ざった水が泥になって、その泥にまみれている。生きる力が表現されていると思いこの写真を選ばせていただきました。



『山里の秋』 撮影地:熊本県高森町 村上憲雄さん (熊本県阿蘇市)

【講評・田沼】 田んぼの写真は毎年多く応募されてきます。良い作品には写真に託されているドラマやそこから生まれる感情といったものがないといけません。この作品は、黄金色の田んぼやその中で作業する農夫たち、その全体の雰囲気がいかにも日本的です。私が世界各国を回っているなかで、特に東南アジアでは稲作が多いのですが、やはり日本の田んぼには日本の田植えや刈り入れなどに特徴があります。この作品では太陽の光でお米を乾燥していますが、ここに日本の文化が培われていると思いいこの作品を選びました。





『航跡』 撮影地:三重県南伊勢町 中西宣夫さん(三重県大紀町)

【講評・田沼】 港から船が出ていく光景のなかに、後ろの小屋、これが4つ並んでおりますが、そこを出ていく船の航跡がなかなか素敵な写真です。大事な水産の風景であり、その美しい日本の風景が海に映し出されていると感じまして選ばせていただきました。周りが暗く映っているのが一つの良さであり、船跡をより力強く見せるために役立ったのだと思います。



特選 『清流に映える』
撮影地:山梨県道志村
清水 進さん
(神奈川県海老名市)



特選 『源流祭の夜』
撮影地:山梨県小菅村
星野郁男さん
(山梨県上野原市)



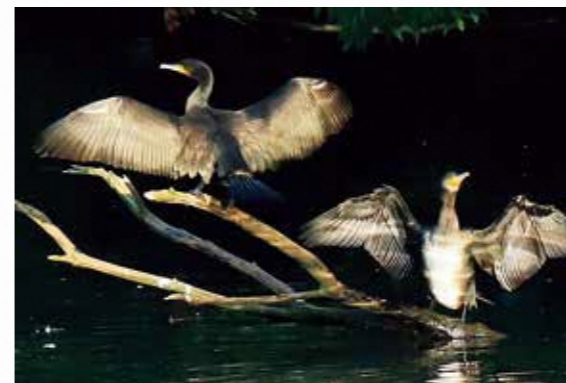
特選 『恵みの雨』
撮影地:宮崎県美郷町
阿部節子さん
(宮崎県延岡市)



特選 『泥だらけの攻防』
撮影地:京都府福知山市
木崎 誠さん(京都府福知山市)



特選 『水辺の恋』
撮影地:高知県高知市
岡崎省吾さん(高知県高知市)



特選 『休息』 撮影地:熊本県阿蘇市
村上利美さん(熊本県阿蘇市)



特選 『お田植神事』 撮影地:三重県志摩市
西村充康さん(奈良県奈良市)



特選 『わ～あ 気持ちいい!!』
撮影地:京都府福知山市
白本文枝さん(京都府福知山市)



特選 『次の場所へ』
撮影地:北海道千歳市
安田敏彦さん(北海道札幌市)



特選 『大空へ』
撮影地:北海道鶴居村
長友逸郎さん(北海道札幌市)

田沼審査員長コメント

私がこのフォトコンテストで審査をさせていただいてもう11年になります。このコンテストは毎年大臣の賞が3つも設けられておりますが、実は大臣から賞をもらうためには毎年申請が必要で、それは簡単には出してもらえない。やはり「水源の里」や地域振興に対しては、国が一生懸命後押しをしようとしているのだらうと思います。

このコンテストでは皆さんに毎年いろいろな作品をご応募いただきますが、大事なことは感動した写真を撮らなければいけないということです。過去にあった写真を真似してもそこに感動はありません。また、応募する作品を撮るにはテーマをよく勉強しないといい写真は撮れません。コンテストに向けて写真を撮る、そのために水源の里に通い、また水源の里の良さをどこに見つけようかということをよく考えていただく。そのなかで水源の里の大切さ、素晴らしさを感じ取っていただきたいということを願ってこのコンテストが開催されております。私は来年も審査員を務めることと思いますが、皆さんもお仲間や周りの人に声をかけて、ふるって応募していただきたいと思っています。

田沼審査員長が文化勲章を受章



審査員長の田沼武能様が令和元年度の文化勲章を写真分野では初めて受章されました。報道カメラマンとしての活動を通じ、国内外の子供を被写体とした独自の世界を作り上げ写真家の地位向上に尽力されたことが評価されました。心からお喜び申し上げます。



栗そのままのホクホクとした味わい

栗きんとん 栗九里(くりくり)

産地直売価格 1本 840円(税込)

日之影町

宮崎県北部に位置し、町の面積277.67kmのうち9割を森林が占める。その豊富な自然環境はユネスコエコパークや世界農業遺産に認定され、森林セラピーツアーなどでは多くの観光客を呼んでいる。神楽、農村歌舞伎や竹細工、わら細工など、地域の伝統も色濃く残る。11月にリニューアルした道の駅「青雲橋」には新たに観光案内施設が設けられ、観光の拠点になっている。



マロンハウス 甲斐果樹園

〒882-0402 宮崎県西臼杵郡日之影町大字岩井川642
Tel 0982-72-7422 Fax 0982-72-2223



栗の名産地である宮崎県高千穂、日之影町産の栗を使って作られる「栗きんとん 栗九里」。実家が栗栽培農家だった社長が、栗を加工することで価値を高め、収穫期だけでなく年間を通じて安定的に販売できないかと試行錯誤を重ねて製品化した。原材料は栗と砂糖のみ、添加物は一切なし、というシンプルなものながら、秋から冬のハイシーズンには1日数百本を売り上げるほどの人気を誇る。その評判は口コミで広がり、現在は加工場に併設する販売所だけでなく、町内や隣接する延岡市にあるアンテナショップや全国のデパート、オンラインショップなどでも販売している。見た目は羊羹のようだが、味はいかに…？

早速、長さ20cmほどの“栗の延べ棒”をカットして、一口。栗きんとんと聞くとねっとりしたイメージがあっ

たが、それを180度覆すホクホクとした食感。品質日本一ともいわれる日之影栗の素材の良さを存分に活かした自然な甘味と風味は、まさに湯がきたての栗そのもの！ 渋皮のkokosaeも感じる奥深い味わいは、もはや“栗よりも栗”。

栗そのままの味に近いお菓子作りの材料としての需要が高いというのも納得。おすすめの食べ方として「無塩バター、生クリームと混ぜ合わせてモンブランに」などといったレシピも紹介されているが、おそらくそんな洒落たことをしているヒマはない。自制しないと、もう一口、もう一口と食べ進め、あっという間に1本完食してしまう。無性に懐かしさが込み上げるような素朴さが後を引くおいしさだ。

【文・白波瀬聡美】

読者プレゼント

アンケート

- Q1. 面白かった・関心を持った記事はなんですか？
- Q2. 今後取り上げてほしい内容はありますか？
- Q3. お住まいは水源の里(限界集落)ですか？またそれに関わらず、地域で解決したい問題があれば教えてください。
- Q4. 水源の里への思いや本誌に関するご意見・ご感想

プレゼント応募方法

はがきにアンケートの回答と住所、氏名、電話番号を明記の上、「水の源」編集委員会「水の源47号」読者プレゼント係までご応募ください。

【令和2年1月26日(日)消印有効】

※当選者の発表は商品の発送をもってかえさせていただきます。
※ご応募いただいた方の個人情報は、商品発送以外の目的では使用しません。



栗きんとん 栗九里 (1本) 3名様

表紙写真



第10回全国水源の里フォトコンテスト 特選「冬湖を楽しむ」

撮影地：兵庫県三田市／撮影者：西村俊裕

本誌に関するお問い合わせ、ご連絡先は

▲全国水源の里連絡協議会 「水の源」編集委員会
綾部市役所 定住交流部 定住・地域政策課 〒623-8501 京都府綾部市若竹町8番地の1
TEL: 0773-42-4271 FAX: 0773-54-0096 E-mail: teijyutiiki@city.ayabe.lg.jp
http://www.suigenosato.com/index.htm

定期購読のお知らせ

「水の源」を年4回お手元にお届けします。年間購読料 1,000円(送料込)
お申し込みは、上記の電話、ファクス、メール、ホームページから

ご案内

Rebornこころのふるさとフォーラム2020

～ 地元でなんしよるそ?～

2020年2月8日(土)
[14:00~19:00]

会場

パルトピアやまぐち

山口県山口市神田町1-80

▶ 参加費 1,000円(税込)

日本青年団協議会は社会教育分野で活躍する団体と連携して実行委員会を組織し、2017年から農山漁村と都市との連携や参加者同士をつなぐ新たなネットワークの構築、活動の輪を広げることを目的に「Rebornこころのふるさとフォーラム」を開催し、今年度で3回目を迎えます。今回は農山漁村のより豊かな実践を発掘することをねらいに、山口県長門市三隅町青年団の協力も得て、2020年2月8日にパルトピアやまぐち(一般財団法人防長青年館)で行います。



“あなただけのHappy Life”を見つけませんか？

日本青年団協議会副会長 藤原 麻美

人口の一極集中により、地域では「人口減少」が大きな課題として取り上げられる一方、都市部では過密を極め、「繋がる力」が失われている現状があります。青年団の中には「自分たちの暮らす地域を盛り上げたい！」という想いを持って活動している団が数多くあります。その活動を通じて、仲間と向き合い、地域と向き合いそして自分自身と向き合い、青年が人として一人前に成長する場として地域の未来を担う人を育ててきました。しかし、人口減少による影響は、地域を舞台に活動する青年団にも顕著に表れており、担い手不足により組織や活動そのものを継続することが難しい状況が生まれています。

全国各地では移住定住政策や関係人口を増やす取り組みなど様々な実践が行われています。青年団のみならず、それぞれの分野で地域を盛り上げ、地域をつくり上げている人々が互いに「繋がる力」を高め合い、連携することにより、地域の未来に新しい可能性が広がるのではないのでしょうか。ライフスタイルが多様化する今だからこそ、自分たちが暮らす地域を見つめること、そしてそこで得た経験を糧とし自分自身の生きる道を豊かに築き上げていくことが、これからの地域を支える大きな礎となると感じています。

ぜひ、「あなただけのHappy Life」を見つけに「Rebornこころのふるさとフォーラム2020」へお越しください！お待ちしております！



三隅青年団久保博成団長と打ち合わせ

担当者の声

「Rebornこころのふるさと滋賀フォーラムin日野」開催から1年

今フォーラムは初めての地方開催とあって事例発表を誰にするか思案しました。元気で若者らしく、未来性があり、日野らしい取り組みをされている方々を、と考えたのが三組の発表者です。日野町連合青年会は少ない団員ながらも村田会長を先頭にとても元気です。田中さん、トムさんは祭りや地ビールで日野町のみならず日本中を元気にしたいと1年足らずで本当に地ビールを生産しました。野矢くんは都会で培ったノウハウで日野町でマルシェを開催し、日野町を元気にしたいと走り回っています。三組とも日野町愛が“半端ない”のです。



町を愛し町を元気にしたい、そんな人たちが輝きながら楽しく活躍できる地方があつてこそ、日本も元気になると思います。

そんなことを再認識したフォーラムを、日本青年団協議会・福永晃仁会長のお膝元でできたことを誇りに思うし、関わっていただいた方々に感謝します。(日野町教育委員会生涯学習課 加納治夫さん)

上流は下流を思い、 下流は上流に感謝する

全国水源の里連絡協議会は、過疎・高齢化の進行により消滅の危機に直面している集落を「水源の里」と呼んでいます。全国の市町村が連携し、集落再生に向けて活動しています。



- 北海道**
新十津川町
美深町
中川町
清里町
豊浦町

- 青森県**
西目屋村

- 岩手県**
遠野市
一関市
葛巻町
西和賀町

- 宮城県**
七ヶ宿町

- 秋田県**
東成瀬村

- 山形県**
小国町
飯豊町

- 福島県**
喜多方市
相馬市
下郷町
南会津町
北塩原村
西会津町
磐梯町
猪苗代町
柳津町
金山町
昭和村
矢祭町
川内村

- 栃木県**
日光市

- 群馬県**
上野村
南牧村
みなかみ町

- 東京都**
檜原村
奥多摩町

- 新潟県**
長岡市
津南町

- 福井県**
おおい町

- 山梨県**
山梨市
笛吹市
上野原市
甲州市
早川町
身延町
道志村
小菅村
丹波山村

- 三重県**
津市
熊野市
大台町
大紀町

- 滋賀県**
米原市

- 京都府**
京都市
福知山市
舞鶴市
綾部市
宮津市
京丹後市
南丹市
京丹波町
与謝野町

- 兵庫県**
丹波市
神河町

- 奈良県**
天川村
川上村

- 和歌山県**
田辺市
有田川町
日高川町
すさみ町
古座川町

- 鳥取県**
若桜町
日野町

- 島根県**
松江市
浜田市
出雲市
益田市
大田市
安来市
江津市
雲南市
奥出雲町
飯南町
川本町
美郷町
邑南町
津和野町
吉賀町
海士町
西ノ島町
佐川町
隠岐の島町

- 岡山県**
真庭市
鏡野町

- 広島県**
庄原市
神石高原町

- 徳島県**
田野町
安田町
北川村
馬路村
芸西村
芸西村
本山町
大豊町
土佐町
大川村
いの町
仁淀川町
中土佐町
佐川町
越知町
栲原町
日高村
津野町
四万十町
大月町
三原村
黒潮町

- 香川県**
美馬市
佐那河内村
那賀町
牟岐町
美波町
海陽町
東みよし町

- 愛媛県**
西予市
久万高原町

- 高知県**
東洋町
奈半利町

- 宮崎県**
延岡市
綾町
木城町
諸塚村
日之影町
- 鹿児島県**
日置市

- 佐賀県**
佐賀市
多久市
- 大分県**
大分市
佐伯市
臼杵市

私たちは水源の里を応援します!!

- 全国環境整備事業協同組合連合会
一般社団法人 全国浄化槽団体連合会
全国森林組合連合会
全国農業協同組合連合会

- 電気事業連合会
独立行政法人 水資源機構
公益社団法人 大分県薬剤師会